

福祉と禅仏教

—児童自立支援施設における禅仏教徒辻光文の実践を考える—

安 田 三江子

仏教福祉研究では、臨済宗の立場からの研究はたいへん少なく空白となっている。しかし、実際には、評価の高い禅仏教徒の実践はあり、その研究は重要である。本研究は本学の卒業生で非常勤講師も長く務めた辻光文の児童自立支援施設における実践を手がかりに禅仏教徒の福祉の実践について研究した。辻は禅について語ることをほとんどしないが、その支援は、まさしく、「己事究明」「自他不二」の具現化であった。

キーワード：禅仏教、仏教福祉、児童福祉、自立支援施設

Buddhism make the good practice of Social welfare. In this fact, I study Zen Buddhist" TUJI Koubun" who was a worker of children's self-reliance support facility. The children who were maltreated by difficult family spoil himself. And they turn to delinquency. It is important to recovery the mind. All children and workers live together. The think and practice is " JITA FUJI of Zen Buddhism, and according to the conditions of children.

Key words : Zen Buddhism, Buddhism Welfare, Child Welfare, Childrens Self-Support Facility

1. はじめに

少子化は進んでいるが、子どもへの虐待は増加傾向にある。子どもをめぐる問題は、多様化し、深刻化しつつある。新しいさまざまな取り組みが重要とされ、児童福祉は、不十分ではあるが、進展しつつある。

とはいえ、新しい支援ばかりが重要であるわけではない。現在も、厚生労働省をして非行ケースへの対応はもとより、他の施設では対応が難しくなったケースの受け皿としての役割を果たす役割をもつとされる、いわゆる最後の砦もいえる支援がある。それは、児童自立支援施設（旧教護院）における、夫婦が住み込みで子どもたちの支援にあたる小舎夫婦制である¹⁾。この支援の方法は明治期の留岡幸助の家庭学校に起源をもち、古い歴史がある。

この支援を、在家の禅仏教徒として生きるなか

で展開していった人物がいる。本学の非常勤講師も長く務めた辻光文氏である。辻光文氏が児童自立支援施設を定年退職してから、ほぼ30年がたつ。現在も、実際にかかわった子ども、同僚、行政関係者から、辻への深い信頼の言葉をきく。辻氏が大切にしていた日々の生活の重視や日記指導などの支援は、代々の職員を通じて、今も、辻氏が在籍した児童自立支援施設に生きているといわれる²⁾。

もちろん、辻氏とて児童自立支援施設の一教護にすぎない。子どもと他の職員がいての児童自立支援施設である。辻氏の貢積を強調しすぎることは辻氏の本意ではないだろう³⁾。なお、このことは、辻の職業観を考えるうえで重要ではあるが、別の研究課題とする。

辻光文氏の実践は、子どもをみつめることはまさしく自らをみつめることになり、子どもの本来の力を見ることは、まさしく自らの非力を見ることであり、支援者、子ども、「両鏡相い照らし」、そこから、双方に、大きな可能性が生じていくといっ

たものである。辻氏は、禅仏教徒としてこの実践を行っていった。

福祉と仏教については、浄土系からの研究が圧倒的多数を占める。しかし、臨済禅からの福祉への研究はたいへん少なく大きな空白となっている。とはいえ、辻氏に限らず、本学の卒業生をはじめ禅に影響を受けた人びとで、よい実践を行っている人は多い。辻氏の実践を手がかりにしながら、この研究の空白も埋めていきたい。なお、以下、辻氏については辻と略し、他の方に関しては敬称は略する。

2. 辻光文の略歴と研究の方法

辻に関しては、児童福祉の関係者からの信頼もあつく、また、他の宗門からも評価が高い。最近、曹洞宗の僧侶である榎谷宗則が、辻へのインタビューにもとづき「一つづきの世界の片すみで」(2015)をまとめた。辻は、福祉と禅仏教に関して考察するにあたり、たいへんふさわしい人物であるといえよう。

まず、辻の略歴と本稿の研究の方法について述べる。

(1) 辻光文の略歴

辻光文は、略歴は以下の通りである。

1930年 1月誕生
1946年 花園大学の前身の臨済学院専門学校入学
1949年 秋田市立中学校教諭
1953年 教え子で集団就職をしていく子どもたちの過酷な状況を知り、いてもたってもおられず、教職を退き、印刷所の集団就職者のための寮に世話役として住みこむ。トラック運転手、一燈園などを経て、柴山全慶老師の援助もあり花園大学再入学。
1957年 須重子夫人と結婚 夫人とともに児童養護施設 海の学園勤務。
1961年 同じく須重子夫人とともに阿武山学園(教護院、現児童自立支援施設)に就職。
1985年 定年退職(24年間勤務)
以降、自宅を「えにし庵」と名づけ、地域の人び

との交流の場として開放する。地域で障害者や高齢者の暮らしを支える活動を行う。また、本学非常勤講師も務める。

現在、辻は、病床にあり、高齢者の福祉施設でくらしながら、体調をみて、実弟の存之氏とともに帰宅をしている。帰宅のおりには、地域の方々、旧知の方々が支える。須重子夫人は、2012年に病気で亡くなった。

(2) 研究の方法

辻の思想と実践について、著書や機関紙などの執筆文書、インタビューや本学関係者との対話から考察する。

①辻の著書について

辻の著書には『いのちのかけら一生活ていただけではいけませんか』(1998)がある。この著書は、辻の講演や雑誌への執筆、エッセイなど1956年～1998年に書かれたものがまとめられている。辻光文の単著書となっているが、11章「嵐のなかのこどもたち」と2章「二人三脚」の後半は須重子夫人によるものである。須重子夫人による文章の引用は、辻1998:須重子ページ数とする。

また、辻が勤めていた阿武山学園(教護院・現児童自立支援施設)に入所をしていた子どもであった和田佳代子の日記(和田1984)が出版されている。辻は、子どもに日記指導を行っており、和田(1984)にも、辻及び須重子夫人の記述がある。この著書は、和田の単著となっているが、著書紹介については、辻と須重子夫人による文章の記載がある。

さらに、本学学内に残る文書に「教室と現場—一つひとつの期待—」と「理事無礙—福祉とはいったい何か?」がある。前者は、「花園大学ふくし」特別寄稿(1)となっているが、「花園大学ふくし」については、詳細を記憶しているひとがいない。また、後者については、出版年、出所ともに不明である。

②辻へのインタビューと対話からの考察

2013年～2015年にかけて9回ほど、「お見舞い」というかたちのなかで、辻にインタビューを行っ

た。また、「お見舞い」にご一緒した本学関係者との対話からも学ぶことは大きかった。

ご一緒した方々は以下の通りである。西村恵信本学元学長（1回）桐田清秀本学名誉教授（2回）津崎哲郎大阪児童相談所元所長・本学元教授（2回）村本詔司本学元教授（2回）慎英弘本学元教授・現非常勤講師（1回）、脇中洋本学元教授・現非常勤講師（1回）である。澤野純一本学非常勤講師は、「お見舞い」すべてに同席をしている。

また、辻は1981年から2002年にわたり、本学で非常勤講師として勤務し、社会福祉演習・実習の講義も担当した（退職後も、2005年3月まで学生相談室アドバイザー、就職課カウンセラーを担当している）。辻の実習指導の最後の5年間は、筆者もこの科目を担当している。実習の講義は、教員どうして情報を共有したり、相談したりすることも多い。筆者が辻から学んだことはたいへん大きい。このことも本稿に反映されている。

3. 倫理的配慮

研究成果について、辻光文氏、及び、実弟の辻存之氏をはじめご親族より「どのように書いてもよい。さらに、みせる必要などもない」とのご理解をいただいている。この言葉も、辻光文氏、存之氏、ならびに秋田の昌東院（実兄大圓師はじめご親族）における禅家独特の表現であり、禅思想の一環であろう（澤野・安田2013）。

本研究では、西村恵信本学元学長、千田たくま本学非常勤講師の禅僧の方の発言に加え、実際に、大阪市の民生局で辻とかかわりがあった竹沢喜心本学教授（阿武山学園元園長）、津崎哲郎本学元教授（大阪市児童相談所元所長）の発言も引用させていただく。また、お名前はあげていないが、児童自立支援関係者の発言も引用している。それぞれの方に本研究における発言の引用については許可をいただいている。

4. 児童自立支援施設についてーくらしのなかで子どもを育てるー

まずは、児童自立支援施設について簡単な説明

をする。現在では職員の通勤による施設も増加してきたが、伝統的には児童自立支援施設は、職員である実夫婦とその家族が小舎に住み込み、家庭的な生活の中で入所児童に一貫性・継続性のある支援を行うという小舎夫婦制という支援形態で展開してきた。児童福祉法により、国と都道府県、政令指定都市には児童自立支援施設の設置義務がある。辻が勤務をした阿武山学園も、大阪市立の小舎夫婦制の教護院（現児童自立支援施設）である。

1998年の児童福祉法の改正により、児童自立支援施設に名称変更がされ、教護という名称であった子どもの支援をする専門職員も、児童自立支援専門員に名称が変更された。また、新法では、義務教育や退所後のアフターケアの導入に関しても明記された。しかしながら、不良行為をなし、又はなすおそれのある児童及び家庭環境その他の環境上の理由により生活指導等を要する児童を入所させ、児童の状況に応じて必要な指導を行い、その自立を支援していく役割については、まったく変わっていない（全国児童自立支援協議会1999）。

従来にもまして、子どもたちの非行など問題行動の背景には、複雑な家庭事情やそこから生じる深刻な虐待があるケースが増加しており、職員の負担は大変大きい。深刻なケースには「小舎夫婦制がもっとも望ましい」とする児童福祉関係者は多い。しかし、特殊な労働様式のために職員のなり手が少ない（そのためこの様式は減少傾向にある）。

子どもたちは、午前中は敷地内の学校に通い、午後は、クラブ活動や農作業、構内の環境整備などさまざまな作業を行う。住み込みである小舎の夫婦の職員は、食事や作業をともにし、子どもの生活全般の支援にかかわっていく。ある職員は「みんなで一生懸命、がんばっていく。これが何よりも大事」という。職員は保護者との対応も行っている。現在では、個別支援計画の設定やそれに伴うアセスメントや、認知行動療法や性加害の再犯防止など、外部と連携したさまざまなプログラムも導入されている。

津崎は、虐待を受けた子どもには共通した特徴があり、その特徴を理解すること、つまり、専門性の習得が必要であると述べる（津崎2015）。しか

し、一方、施設をはなれ社会生活を自ら営むことができるようになった子どもたちには、いっしょに何かをした、たとえば、ともに笑った、ともに失敗したといった「人間らしさ」感じさせる職員の存在が必ずあると指摘する（これは、児童養護施設も同様である）。

人は自分の生きざまを通してこそ、人にさまざまなことを伝えることができる。このことは、親子などの近い関係者においてもあてはまるが、利用者と支援者との関係でもあてはまる（安田:2015）。小舎夫婦制では、職員はまさしく自らの生きざまをもって子どもの人間の根幹にかかわる部分を成長させていく。

このようなことを反映し、ある児童自立支援施設の施設長は「認知行動療法はじめさまざまなプログラムも、職員と子どもたちとの間に信頼関係が構築され、生活が安定しないと機能することはない」と述べる。

なお、本稿では、辻の在職当時は、児童自立支援施設は、教護院、児童自立専門員は教護という呼び方であったため、教護院、教護という名称を用いる。

5. 先行研究

仏教福祉研究には伝統がある。中垣昌美、長谷川匡俊などが、主要な研究者としてあげられるだろう。これらの研究者は、自らも浄土系の僧侶でもあることに特徴がある。中垣（1998）は慈悲を福祉の根底においている。また、長谷川（2011）は、念仏者という浄土宗の門徒（信者）の実践に焦点をあてている。しかし、澤野（2011）は、従来までの仏教福祉研究が、慈悲＝福祉となりがちだったことに疑問を提示している。

最近、日本仏教福祉学会は入門書を出版した（日本仏教福祉学会 2014）。だが、この研究には、臨済禅が背景にある研究者は参加していない。臨済禅からの社会福祉研究には、島崎（2014）など宗教的エートスから福祉のあり方を指摘したものはあるが、ごくわずかであるからである。

なぜ、浄土系の仏教からの福祉研究はあり、臨済禅において、福祉の研究がほとんどないのか。未

寺においては、福祉施設を運営している寺も多いのに、それが学問的研究に昇華しないのは何故だろうか。ここで、検討する必要がある。

まず、それぞれの仏教のもつ特徴がある。それぞれの仏教宗派は依拠する経典が異なる。禅仏教は、なかでも、臨済宗は釈迦の教えにたちもどり、経典にはやや距離をとり、座禅など身体での体得をめざす。浄土系仏教は最終的には「救い」を求めるが、禅仏教は最終的に「悟り」を求める。めざすところは人間としてのよりよい生き方を求めるということで共通であるが、この違いは、仏教の具体的な展開に表れてくる。

「慈悲」という思想は「救い」と結びつきやすく他者へのなんらかの行為、いわゆる福祉的行為に結びつきやすい。一方「悟り」は自らが自力で行き着く境地であり、そこに、他者へのなんらかの行為を行うということは、結びつきにくい。

しかしながら、臨済宗においても「福祉」が重要でないということはない。たとえば、辻は『福祉』というの、単純に「しあわせ幸福という程の意味」をもち、「福祉が自らを含んだ、人間」のしあわせ、人間の幸福という限り、これ程又深い意味をもつ言葉はない」と述べており、人間にとって、とても大切なこととしている（辻 出版年不詳 「理事無礙—福祉とは何か？」）。

実際に、臨済宗の宗門では、過去から、さまざまな実践はあり、とりわけ、昨今では、阪神大震災以降、ボランティアがさかんに行われている。東日本大震災でも、さまざまな僧侶の取り組みがあった。最近では、病気や災害などにあったひとびととかかわる臨床僧の役割の重要性も強調されるようになってきている。もちろん、本学においても、社会福祉学部があり、福祉施設の現場における優れた人材を輩出している。

にもかかわらず、社会福祉についての研究は、ほぼ、行なわれていない。なぜだろうか。現代の社会福祉は、個人の客体化が大前提におかれ、個人の自主性と役割が重視され、そのうえで、社会事業（現在では社会福祉サービス）が、国家、及び地域で、展開されていく。

たとえば、社会福祉については、最近では、以下のように定義をされている。「社会福祉はいまこ

で困難をかかえる人、困窮している人を援ける制度的仕組みである。それも、『だれであろうと援けを必要とする人をだれであろうと援けられる人が援ける』仕組みである。」さらに、この援けの担い手と援けの方法について以下のように考えられている。「自分たちにとって特別大切な人を、自分たちが援ける、それがより自然な心情や関係性に基づく『名前のある福祉』であるとすると、社会福祉は『名前を必要としない福祉』である。誰であろうと『援け』だれであろうと『援けられる』福祉である」(後藤 2009)。

このことに異存はない。しかし、禅仏教がめざしているのは、だれもが名前のあることである、また、以上の論理は、それぞれが独立している個人であることが前提とされているが、一方、仏教は、なかでも、禅仏教は、人間について、あくまで、名前がある「自ら」を対象としつつも、「自ら」と他者も含んだ「大きな存在」としての人間を前提とし、自然をも含めた存在まで生命のつながりとのなかでとらえる。つまり、単純に、人間ひとりひとりの客体化の方向には向かわない。

多くの研究は、社会福祉に限らず、自分と他人と切り離れた個人を前提とする。コミュニティにおける福祉も重要視されるが、コミュニティは対象化された個人の集合体としてとらえられる。しかし、臨済禅では、対象化を単純によしとしない。また、自らの力での「悟り」への志向ゆえ、「だれもが名前のあること」をめざす。そのため、人間の行動の結果としての「社会福祉」の実践という実態はあっても、研究としてはなじみがなかったのではないだろうか。

さらに、禅に限らず、仏教には現実社会の具体的な苦悩(貧、病、争など)に対して冷淡に見える所がある。僧侶は財施(物質的救済)をしてはならない、という戒律の規定もある(ただ、大乘の『梵網経』は在家出家共通であるから、財施も可能とする)。この点については更に掘り下げていくことは必要だろう。また、沖本は、禅仏教は、あくまでひとに内在するものであり、「非社会的なもの」であるとさえする(沖本 1990:35)この思想の延長線上でもあるが、禅仏教には「禅は禅」であり「他は他」とあるという思想もある。だが、禅

僧の立場からすると、「『偉い』のはこのひとたちであり、『禅』ではない」という発言になる(千田 たくま本学非常勤講師)。「禅」は、このひとたちの仕事に現れていないという考え方もあるだろうが、それ以前に、禅仏教では、さまざまなひとの行動などの成果は、そのひと「自ら」に起因するという思想があり、その反映でもあるだろう。

禅仏教は、人びとのよりよく生きる生きかたに対して貢献することをめざしても、「非社会的な」仏教という言葉に示されるように、自らの思想でひとや社会を変えることに距離をおくこともある。

とはいえ、このような禅仏教の思想をも含め、禅仏教徒の福祉を含めたその実践についての研究は必要であろう。なぜなら、現実には、禅仏教徒による実践はあるからである。

6. 禅仏教徒としての辻光文—禅を語らず禅に生きる—

まず、禅仏教徒としての辻について考察してみよう。

辻は、子どものころから、禅仏教徒として生きたひとである。禅寺に生まれたが、禅への純粋な志向ゆえ、社会のなかにある寺の役割についてたいへんつらく感じた。幼少時より、辻はひとが亡くなることにより収入を得る寺の存在にいてもたってもおられず、教団のあり方にも深い疑問をもっていたのである。

辻は、父親からは、僧侶としての大成を期待されるが、辻には、禅仏教への強い帰依はあるものの、僧侶になることには躊躇があり、紆余曲折を経て児童福祉の領域に入る。児童養護施設を経て、31歳で教護院に落ち着く。そこで、24年間を過ごす。辻は、生涯の師となる柴山全慶に深く帰依したものの、僧侶ではなく在家として生きることになる。ここまでの経緯は、安田・澤野(2013)、澤野(2014)に詳しい。

辻は、教護院での住み込み生活のなかで、須重子夫人とともに、24時間、子どもたちとくらしただ。教護院とは、「職場のど真ん中に私生活」(辻 1998:121)があり、この教護院で、辻の禅の展開が

あったといえよう。辻にとり、教護院はまさしく道場であった。以下は、辻が、教護院に就職をして、ほぼ10年目42歳のときの言葉である。

生きるということの意味は、世の哀感をどれだけ自分自身の誠の哀感とするか、というところへ帰するのである。そういう意味では、中途半端な生ぬるい人生ではなく、こどもたちの寂寥孤独、慟哭悲痛の経験をわたしたちは、人生のひとつの宝とするものである。それは、人間の愛情や理性を超えるものであり、共に、生きる者の悲しみとでもいえる。

幸か不幸か、『わが子』というものを持たず、これという自分の家庭を持たぬ者の生きざまでもある。私にとっての家庭は、それを、どこまでも真の道場となし得るか、ということと存在する。そして、その『理』は会得し易くとも、その『事』は遅々として手に入らない。然し、歩む程に着実に、鮮やかな道である。その精神と態度において、生涯、その死ぬる日まで、歩み続ける他はあるまい(辻1998:22)。(傍線は筆者による)

辻の思想のエッセンスがこの文章にあらわれている。ここでは、「私にとっての家庭は、それを、どこまでの真の道場となし得るか」というという言葉に注目したい。「道場」とは、禅僧が修行をする場を意味している。

また、辻の結婚のときに柴山がおくった「紅爐上一点雪」という墨跡がある。辻が、35歳のときの文章にこの墨跡について「シビレルような愛情なんてジュウと消えてお仕舞いだというのであろうか、それと何もないところからでてきたんだからサラサラと帰っていけとでもいうのであろうか。実に生涯の公案」(傍線は筆者による)だと受けとめている(辻1998:17)という記述がある。なお、辻の56才のときの文章にも、この公案について、生涯の公案であるとの記述があり(辻1998:242)、辻が柴山からの公案に向かい続けてきたことがわかる。

この42歳のときの言葉から、十年を経て、52歳

の辻は、次のように語る。

端的に言って不良児も非行児も、つまるところ、寂しい孤独な子の異名でしかない。もし禅が心の名であり、生活であるというのなら、こうしてこの子等と精一杯生きるいのちがそのまま仏教でなければならぬと思うのである(辻1998:221)。

辻は55歳で定年退職をする(その当時、55歳が定年であった)。56歳になった辻は、24年間の教護院の生活を経て、亡くなった柴山の言葉をふりかえる。

臨済宗の流れに立つものは、始覚的な宗教観に立ち、現実生活の上に宗教生活を打ち立て、現前の自己に宗教的人格を実現して行くところに安心の核心がなければなりません。大知は大悲の上に行せられていくということなのであります(「臨済宗禅の性格」)(辻1998:242)。

禅が「本覚」(本来悟っている)の立場なのか「始覚」(努力して悟る)の立場なのか、議論の分かれる所であろうが、辻はあえて「迷悟の凡夫」の立場にたつ。そして、師である柴山のことを「ご縁を思うと、人生の不思議がしみじみと思われ、ありがたさに胸が暑くあるばかり」(辻1998:242)としている。

辻が生きるにあたり、臨済禅と師である柴山がいかに大きな存在であったか、理解できる。辻の禅は柴山の禅を離れることなく、現在までも、不離叢林、決して道場を離れることはなかったのではないかと考える⁴⁾。

辻にとって、教護院でのくらしは「家庭という道場」(辻1998:22)であり「現実生活の上に宗教生活を打ち立て」(辻1998:22)たものであり、このくらしは、辻における禅の具現化であったともいえよう。

とはいえ、辻はすんなり、教護という職業に甘んじていたわけではない。教護という言葉には以下のような批判を呈している。教護は「教育保護

からくる略称」(辻 1998:25)であり、さらに「教護児といえ、不良児、非行少年の類にしかならぬ単なるレッテル主義」であり、これは「決して子どもの側の痛みにも共感した発言でなく、まさしく大人の側のものとして、強いていえば教護院業務を誇示」しており、「児童福祉施設、それだけでいいのであり、阿武山学園でいいはず」であるとしている。

さらに、辻は、教護という仕事に関しても、疑義も呈している(辻 1998:36-37)。教護の仕事は、子どもたちの不幸を土台にした仕事であり、不幸な子どもたちがいるからこそ、生じるとする。それは、子どもたちのときに「何んといったってオマエの所は人が死んだら儲かるもん」といわれた寺の生まれと「どう違うのであろうか」とまで極言している。

とはいえ、教護として生きた辻には、子どもたちがいた。「木枯らしの風が胸元を吹き抜けていくようなやるせなさを思わせるのも子ども達であるなら、また、私にこの世に生きて来たことの意味を諒とさせるのも実は子どもたちであった」。この子どもたちの存在こそが、教護という職業に辻を留まらせた唯一の源である。

そして、日々のくらしのなかで、辻が禅や仏教を語ることは決して多くなかった。辻と50年の交流がある竹沢喜心元本学教授(阿武山学園元園長)は、辻の禅仏教への深い帰依については十分に知っていたが、「そういえば辻先生と仏教の話をしたことはない」と述べる。辻のこの姿勢は本学でも変わらなかった。学生のときに大病をして生死をさまよひ、辻にたいへん深く励まされ、生きる力を得たという本学の卒業生がいる(現在は回復し、病院でソーシャルワーカーの仕事をしている)。このひとにしても辻のことは「そういえば、お寺出身の先生」くらいの認識である。

辻は、「禅を語らず禅に生きる」ひとであるといえよう。他の禅僧の方々にもあるように「禅は禅」「福祉は福祉」ということが、姿勢として、辻にもあるのかもしれない。ただ、これは、まさしく禅はそのひとの生き方にこそあらわれる、言葉ではないという辻の生き方そのものである。

禅の言葉に、「不立文字、教外別伝、直指人心、

見性成佛」がある。この言葉の理解は筆者の及ぶところではない。しかし、同時期、本学で同じ業務を担当した筆者のような比較的短期間のかかわりの者であっても、辻は姿をもって教えてくれた。いまも、困ったことがあると辻の姿を思い出す。ひとは自らの生き方をもってこそひとに伝えられることがありここからこそひとは育っていく。僭越ではあるが、筆者自らをしてこのように感じる。

7. 教護院でのくらし

それでは、辻での実践とはどのようなものであったのだろうか。

(1) 子どもたちの背景—『君看よ双眼の色、語らざるは憂いなきに似たり』—

まず、児童自立支援施設に入所をしている子どもたちを、辻はどのようにとらえていたのだろうか。非行を犯し、教護院に入所してくる子どもたちの背景にはたいへん深刻なものがある。

紅顔に笑みを浮かべ自ら語ることでもなかったら、何一つ苦悩を知らぬ気に駆け廻っている子等が一度心を開く時溢れてくるものは人生に対する悲哀である。良寛禅師が好んだという『君看よ双眼の色、語らざるは憂いなきに似たり』という良寛の言葉を、私は、この子らに染々と思う⁵⁾。(辻、出版年不詳「教室と現場—一つの期待」)

辻が担当した女子寮の子どもたちの中には、壮絶なくらしを経て、多種多様な非行歴もあり、中学生の年齢で出産経験のある子どもも、それなりの数はいたであろう。辻は、このような子どもたちに、よくもこうも違うさまざまな問題を抱えているものだとし、「子どもたち一人ひとりの生い立ちは「窮鼠猫を噛む」ということわざに似ている」とする(辻 1998:27)。「普通、鼠は好んで猫を噛むことはしない。鼠は猫を相手にしてもともと歯のたたぬ弱い動物である。それが執拗に追いつめられて遂に反撃にでざるを得なかったという事情は、丁度、大人のつごうや勝手に情緒の障害を起

こした子どもたちの生きざまを思わせてならぬのである。」(辻 1998:27) としている。

だが、「大人のつごうや勝手」(辻 1998:27) の背景の真っ只中にいる子どもたちのその主たる背景である親も、また、さまざまな社会人間の深刻な問題の渦中にある。精神疾患や知的・発達障害などの疑いのある親も少なくない。これらがあいまって、家庭には、さまざまな暴力が生じやすく、子どもたちへの虐待や不適切な養育態度につながっていく。ただ、その親も、同じような状況の中で育っているケースも多くあり、貧困や虐待の連鎖がそこにはある。とはいえ、虐待の連鎖は、さまざまなひとのかかわり、支援などにより、この連鎖を断つことは可能であり、辻をはじめ教護院の実践も、この一環でもある。

(2) 教護院でくらす

それでは、具体的に、どのように辻は支援にあたったのだろうか。

本節の題は「教護院でくらす」である。これは、辻が退職して1990年に語った言葉からとったものである。まずは「くらす」ということを、辻は強調する。

阿武山学園で二四年の間、直接寝食を共にした寮の子どもの数は延べ二五〇人、間接的にもふれた児童も合わせれば凡そ一〇〇〇人程にもなりましょうか。私どもの場合、いわゆる勤務をしたというより一緒に暮らしたという方が当を得ているかも知れません。特別なことがない限り三度の食事を共にして生きてきたのですから。(辻 1998:147)

何かをするということの強調ではなく、「くらす」としたこの言葉の中に、辻の実践の神髄はある。辻とともに須重子夫人は、子どもたちのくらしに大変大きな役割を担っている。ここでは、須重子夫人の以下の文章を掲載する。辻と思想と実践をいかに共有していたかが、推察できる。

幼い日の、根を育てて眼を育てるべき時期

こそ、私たちおとなは、どこまでもきめ細やかに、大切にすべきです。その土壌(家庭や子どもの生活の場)を豊かに、そして、さんさんとする太陽の光と適度の慈雨、ときには家族とともども嵐にゆらぎながらも、一生懸命に柔らかい芽と根を育て、せっかくのかけがえのない、お互いの生を営みたいと念じます。(辻 1998: 須重子 140)

(3) 子どものなかに自己をみる

子どもたちとのくらしのなかで、辻は、自分自らも、自己を生きることを課していた。それは、何よりも子どもたちのなかに自己をみたからである。また、この背景には、「子どもは親のいう通りにはならず親が生きたように生きる」(辻 1998:43)。という子どもの実態も大きいであろう。辻は、親ではないが、子どもに大変大きな影響を及ぼす教護である。辻にも十分あてはまったのであろう。

辻は「学園に子ども達が何人居っても子どもは一人ひとり他にかけがえのないのちなのである。そして、そののちを見ることは実は己ののちをみることでもあった。」(辻 1998:28) として、S子の話しを述べている。以下が概略である(辻 1998:28-30)。

S子は本当に手に負えぬ子であった。実母の男性との失踪、実父の再婚などに伴い児童養護施設への入所と退所が繰り返され、最後、本人自身の「施設無断外出・家出・盗みのある女兒」ということで、教護院に入所することになった。無断外出をはじめ問題行動は多く、陰日向の多い虚言行動により他児の不評も強かった。

やがてはS子が唯一の頼りとしていた父も亡くなってしまった。亡くなった父がもっていた定期入れを大事に持ち歩いてはいたものの汲み取り式の便所におとしてしまう。黄色に染まりどうにもならなくなってしまう。辻は、S子のために遺碑を作って朝夕のお祈りを繰り返した月日もあったが、S子の生活態度は年齢の成長と共に一層不安なものを加味していった。態度はつねに表面的誤魔化しのものが多かった。教護院の小舎のなかでのよりよい風土づくりは支援の重要な基盤である。S子のような子どもの存在が全体に及ぼす影響はと

ても大きいと考えられる。辻の大変さが垣間みえる。

やがて、S子は、命にかかわる病気と診断され、入院することになる。辻は以下のように思う（辻1998:28）。

日頃、憎たらしいとさえ思うことのあるS子であっても、もう二度とS子は私共の集いには帰ってくることはないのだ。この美しい山も緑もS子はもう再びみることもなくこの世を間もなく去ってしまうかもしれない・・・そう思うと、（筆者注、自分の病状のことなど何も知らず）喜々としている姿がかえっていじらしく、今この子のためならもうどんなこともしてあげたいという思いであった。私共はもうS子の指導とか教育とかということがかかわることを忘れていた。私はS子のいのちを初めてみた。そしてS子のことを長い間みていて本当はS子のことを少しもみていなかったのだと思った。

S子は一時、生命が危ぶまれたが、やがて全快し退院する。「S子は本当にかわっていった。自分のいのちを自分で生きる積極的な子どもに見事になっていった。（中略）そして、常にマイナスをプラスに転化する根気強い話し合い、集会を繰り返す中で、S子はその核ともなった。子どもたちはみな生き生きとしていた。小さい子からも慕われ（中略）今は近くのレストランでウェイトレスとして働いている」（辻1998:29-30）

子どもをみつめることはまさしく自らをみつめることとである。辻はS子というひとりの人間もみつめた。S子のいのちそのものを思い、そこから自分の非力を思った。そして、辻に変革がおこり、S子も変革していった。禅でいう「両鏡相照らす」関係であろう。

(4) 「指導を超える世界」・・・己事究明と自他不二
上記のS子のケースの、辻の変革、S子の変革と、直接的な因果関係はありそうで実はないのかもしれない。S子が自らを生きるようになったこと

に関して、辻は、自分の貢献を成果としてまったくあげていない。それどころか「なまじっか子どもを指導し、直そうなどという意識をもたぬ世界である。その時、子どもは自然に直るものは直るのである。」（辻1998:33）とまで言い切る。

さらに、「甚だ無責任に聞こえるが、これも、また、そのまま己を深くみつめることにかかわっている。自己との闘いなしにそれは不可能である」（辻1998:32）「たとえそれが子どものどんな問題であっても、それを最後に問題とし、それを乗り越え克服し生きていくのはその子ども自身なのだ」（辻1998:39）とまでいいきる。あくまで、辻は、子どもの人生は子どもが主人公であり、子どもが自らの力で自らが主人公となり人生を生きていくことを求める。

それでは、教護の役割は何なのだろうか。子どもへの指導について「『何かにする』などという自己の思いがいかにか身勝手なものであるか」とまでいう。だが「指導者が指導を超え、己をみつめて生きることはそのまま子どもが子ども自身のいのちを積極的に生きる力その力をもつこととかわる」（辻1998:33）

すなわち、指導者の己事究明こそが子どもの力につながっていくという。あくまで、指導者の自力、子どもの自力を強調するが、それは決してふたつに分かれているわけではなくつながっている。まさしく自他不二ともいえよう。沖本は「禅仏教は自力を何よりも強調するが、それは他力を前提にしている」という（沖本1998:42）。

「私共には、ただその時その時を精一杯して生きる以外に方法はなく、ただそれだけのことである。それでいい筈である」「待つことは育てることである」と結論する（辻1998:33）。

(5) 辻の支援への姿勢—効果への疑問と批判

なお、辻の実践は、たえず、未来の子どものあるようをみつめ、生じていたものであることも、確認しておかなければならない。現在では、どの領域の研究でも効果とその測定が重視される。本研究に、おいても、効果という視点からの考察もいれざるをえないだろう。しかし、辻は効果を考えるからこそ、効果に関して疑問と批判を行っている。

まず、ひとつの大きな山をこえたともいうべき子どもたちの状況を辻は「転ずる」と述べる（辻1998:61）。なぜ、転じたなのだろうか。成長したなどでいう、未来志向の言葉ではないのだろうか。そして、なぜ、効果という考え方に関して、辻が疑問や批判を述べているのかについて考察していく（辻1998:62）。

（筆者注、子どもが）自分の少年期の話しを気楽に自分の嫁さんや婿さんにしたりしています。何かそういう気楽な姿をみるとあの子が悪かったとか、あれは「番長だった」とかいうことはどこへいったんだろう。（中略）今では、かつてのことも、楽しくさらさらと語り合えるのです。しかし、学園にいたころはそうではなく、迷いの最中であり、それを転じて悟りに至った人間の姿じゃないかなあと思います。

しかし、この「転ずる」ということにあたっては、「例えでしか言えないこともたくさんある」とし次のたとえを使う。「渋柿の渋そのままの甘さかな」「渋柿は渋くないと甘くならない。渋ければ渋いほど、干柿にしたら甘くなる」。つまり「不良性という問題と善良性、あるいは迷いと悟りということあり、これはこのへんに鍵がある。つまり、毒薬転じて良薬になる」（辻1998:61）という。

そして毒薬と良薬は決して別ではなく、しかし、別ではないから同じかというのと決して同じではない。また、「水車は半分は水のなかに浸かっている、半分は水の外からでている」だから「はじめて水車は回る」としている（辻1998:61）。この上記に関しては、「煩惱即菩提」「即」「不二」という、辻としては、珍しく、仏教の言葉を使っている（辻1998:61）。

「転ずる」ということに関して、辻は直接には言及していないが、子どもが再び、悪い方向にいつてしまう「転じてしまう」という可能性までも含んだ考えであるともいえよう。また、たとえそうとなっても、再び、善良な人生を生きていくことは可能であると、先のその先の未来まで見据えた内容をもつ。一方、水車のたとえも深い。子ども

はというより、ひとは善悪双方もっているからこそ、それがひとつの原動力にもなり水車を回して、つまり、生きていけるともとらえることができる。効果という発想がいかに短期的で表面的かということを実感させる。

加えて、辻の効果に関しての批判は、具体的な体験にも基づく。辻は、ひとのことを悪くいうことは、まずない。辻が阿武山学園で副園長当時の園長であった竹沢喜心元本学教授は「辻先生はひとのことを悪くいうことはない。だれがどの役職ついたなどそんなことには本当に無関心どころか、まったく疎い。」と、敬愛を、こめて語る。

だが、そのような辻が、今でも「あれはいやだった」といつて語ることがある。当時、阿武山学園で、たいへん厳しい管理体制をひいていたひとつの寮があった。その寮は一見落ち着いているように見え、中央の行政などからも評価が高かった。しかし、内側は子どもどうしにおいても力の支配がみられ、よくやっていると評されるこどもの目は暗く、卒園後は犯罪に走るケースも多かった。

つまり、子どもはというより、人間は「悪い」からいつて「悪い」わけでもなく、「よい」からいつて「よい」だけがそのひとの姿ではない。「よい」と「悪い」がふたつに分かれるわけではないところに人間のあり方がある。辻は支援というより、人間は、短期的に表面に現れる効果で測れるような単純なものではないということ、強く実感していたのである。

8. 現在の辻—それこそが、禅—

現在の辻は、阿武山学園から、高槻での地域でのくらしをへて、病床にある。辻は、ふだんは、介護施設にいて実弟の存之氏とともにときどき自宅にもどる。近隣の方々が帰宅をした辻を支える。

辻は、今も柴山のことを深い尊敬の念をもって語る。えにし庵で自らが住まいとして使っている部屋には、柴山の写真が飾ってある。辻は、今も、かわらず、柴山のもとにいる。

現在も、自ら仏教のことを語ることはない。澤野純一本学非常勤講師が、辻から仏教を学ぶ志をもち、辻に仏教を問いかけたことにより、辻は、語っ

てくれる。体調のよいときには、その語りは2時間を超える。なお、現在の辻の禅仏教徒としてのあり方については、別の研究に機会をゆずる。

昨年、辻は教護をしていたときのことを以下のように語った。

「子どもと一緒に、子どもと生きながら、朝、昼、晩一緒に食事をして、一緒に寝起きをして。。。あの時分に、生きて来た中で、何か、教えられる、考えられることがあるんです。」(2014年7月村本詔司元本学教授、澤野純一非常勤講師同席)

そして、最近は、かつての実践を振り返り「ただ、ただ、子どもたちといただけ。それだけ。。」という。

このような辻に、西村恵信本学元学長は声をかける。「修行も座禅もいらんのと違いますか。子どもたちという。それこそが禅。」(2015年5月津崎哲郎元本学教授、脇中洋元本学教授、澤野純一本学非常勤講師同席)

9. おわりに

辻を支援者として、深く尊敬しているひとは多い。たとえば、津崎哲郎元本学教授は、「辻先生は相手の立場が上であっても下であっても、態度を変えることはない。自分がひとと接するときの規範にしている」とまでいきる。

この辻のひととしてのあり方は、辻が普段は語らない禅仏教徒としての源にあるのでないかと考え、辻の思想と実践を研究したが、まさしく、そのとおりであったよう感じる。禅仏教徒としての生き方の具現が支援となりあらわれていた。

支援者の己事究明は、自他不二となり、当事者となつたり、それが、当事者の己事究明につながっていく。これは、当事者、自らが自分の人生の主人公になっていくという、支援の究極の目的とも合致する。ここに、禅仏教徒と福祉の実践が結びつく。このことが、辻から、確認できた。なお、このことは辻においては、先鋭化してみられるが、禅にかかわるひとの多くに、多かれ少なかれ、普遍化していることでもあるといえよう。

とはいえ、支援者の己事究明と当事者の己事究明には、直接的な因果関係はみられず、「自他不二」

という結論は科学的ではないという批判もありうるだろう。辻の効果についての批判から考えると、ここに科学という手法をもちこむことじたいに問題があるのかもしれない。しかしながら、禅の実践が人間に英知をもたらすものであるとしたら、科学からのアプローチも可能であるはずである。

禅の思想と世界観は、ハーバート・A・サイモン、ジェームズ・G・マーチ、オリバー・ウィリアムソン、カール・E・ワイク、高橋伸夫と、世界的な行動科学研究の研究者が指摘する世界にたいへん近いように筆者は考える。これらの行動科学の研究から禅の思想にアプローチをしていくことは重要であろう。なぜならば、禅仏教の思想が世界で通用し、共感される理由はここにもあるのかもしれないからである。

謝辞

辻光文先生及び辻存之氏にご高配を賜りました。

本研究は2012年度花園大学特別研究費助成を受けています。

ここに感謝の意を記します。

注

- 1) 厚生労働省ホームページ http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/syakaiteki_yougo/01.html 2015年9月20日閲覧
- 2) 津崎哲郎本学元教授は、大阪市児童相談所勤務のときから、旧教護院(現児童自立支援施設)の辻と交流がある。子どもへの日記指導は今も行われており、これは辻が始めたものだとする。また、辻と同時期に別の教護院で教護を務めた児童自立支援施設の元施設長は、辻の生活を重視する支援の伝統は今も辻が勤務をした施設に残るという。
- 3) 辻は「柴山全慶」という「敬慕して止まぬ恩師」の「花語らず」の一詩を引用しながら、以下のように述べている。「いう迄もなく『花』とはいのちのことである。教護などというのは、ただだつて咲き黙って散っていく。ただそれでいいような気もする。それはまた、そうして死んでいった多くの教護や子どもたちの、いのちを見るからである」(辻1998:37)
- 4) 不離叢林は、道元の言葉であり、「どこにしようと決して道場を離れない」という意味である。なお、この言葉については、筆者は河野(2011:31)から、学んでいる。

福祉と禅仏教

もちろん、臨済宗にも「途中にあつて家舎を離れず」という言葉はあり、黄檗宗にも「拳足不足、不離道場」という言葉もあり、これは維摩経からきている

- 5) 一般には「君看よ双眼の色、語らざれば憂いなきに似たり」と読みくですが、辻は独特の読みをする。意味に大差はない。

文献

- 長谷川匡俊 (2011) 『念仏者の福祉思想と実践 近世から現代にいたる浄土宗僧の系譜』法蔵館
- 河野太通、対本宗訓 (2011) 『闘う仏教』春秋社
- 河野太通「寄り添う」『禅文化—特集 臨床僧』禅文化研究所 2013 年秋号
- 厚生労働省 . (日付不明).
- 後藤玲子 (2009) 「福祉の思想」『新・社会福祉士養成講座 4 現代社会と福祉』中央法規。
- 櫛谷宗則 (2015) 「一つづきの世界の片すみで」『共に育つ』第 15 号 p.14-23 阿部印刷
- 日本仏教社会福祉学会 編集 (2014) 『仏教社会福祉入門』法蔵館
- 中垣昌美 (1998) 『仏教社会福祉論考』法蔵館 島崎義孝 (2014) 『人間学的福祉論—木の生き方に学ぶ』批評社
- 沖本克己 (1990) 『禅の思想とその流れ』世界聖典刊行協会
- 島崎義孝 (2006) 『現代福祉マナダラ』ふくろう出版
- 澤野純一 (2011a) 「『仏教』と『社会福祉』の関係性に関する諸類型について」『福祉と人間科学』第 21 号
- 澤野純一 (2011b) 「仏教と社会福祉の関係性に対する試論」『花園大学社会福祉学部研究紀要』第 19 号 辻光文 (発行年不詳) 「理事無礙—福祉とはいったい何か？」
- 澤野純一 (2013) 「『いのちのかけら - 生きているだけではいけませんか - 』を読む - 「共に生きる」福祉と禅仏教」『福祉と人間科学』23 号
- 澤野純一 (2014) 「在家仏教者・辻光文の福祉実践 - 禅宗と在家仏教徒 (2)」『花園大学社会福祉学部研究紀要』第 22 号
- 辻光文 (1999) 『いのちのかけら—生きているだけではいけませんか—』クイッス
- 辻光文 (発行年不詳) 「特別寄稿 (1) 教室と現場—一つひとつの期待—」
- 辻光文 (発行年不詳) 「理事無礙—福祉とはいったい何か?—」
- 安田三江子・澤野純一 (2013) 「禅宗と在家仏教徒 - 若き日の辻光文 - 僧侶ではなく在家仏教徒として生きるまで - 」『花園大学社会福祉学部研究紀要』第 21 号
- 全国児童自立支援施設協議会編 (1999) 『新訂版児童自立支援施設 (旧教護院) 運営ハンドブック』三学出版